０７／０８／１９　　礼拝メッセージ　　岡田大輔　副牧師

主　　題：あなたの人生の色は？　２
聖書箇所：詩篇　１６篇

いつのことだったかよく憶えていないのですが、多分私が中学生の頃だったと思います。ある先輩から私と友人たちは説教されたことがありました。多分私たちが何か良くないことをしたからだと思いますが、その時、彼は私たちに話し終わったとき、私たちの様子を見てこのように言いました。なぜなら、私たちが話を聞いている間中の私たちの態度が余り良くなかったからでしょう。多分、尊敬を払わず横を向いていたのでしょう。彼は「おまえは本当に反省しているのか？おまえの反省の色は何色だ？」と。その時、私は一生懸命考えました。いったい、反省の色って何色なんだろう？と実際の色を思いながら、いろいろ考えました。もちろん、彼が私たちに求めていたことは「灰色です」などという実際の色ではなく、私たちの態度、現われている状態がどういうものなのかということを聞き、その回答です。それと同じように、私たちは前回、ここでともに学びをしたときから、私たちの人生の色はいったいどんな色なのかということを考えて来ました。私たちの人生の色が何色であれ、実際の色のことではまく、私たちが歩んで行く中で、私たちを特徴付ける状態、態度、生き方がどういうものなのかということを、ごいっしょに考えたいのです。そして、そのことを考えるに当たって、私たちはダビデが書いたこの詩篇を見始めました。詩篇１６篇を読みましょう。

16:1 神よ。私をお守りください。私は、あなたに身を避けます。
:2 私は、主に申し上げました。「あなたこそ、私の主。私の幸いは、あなたのほかにはありません。」
:3 地にある聖徒たちには威厳があり、私の喜びはすべて、彼らの中にあります。
:4 ほかの神へ走った者の痛みは増し加わりましょう。私は、彼らの注ぐ血の酒を注がず、その名を口に唱えません。
:5 主は、私へのゆずりの地所、また私への杯です。あなたは、私の受ける分を、堅く保っていてくださいます。
:6 測り綱は、私の好む所に落ちた。まことに、私への、すばらしいゆずりの地だ。
:7 私は助言を下さった主をほめたたえる。まことに、夜になると、私の心が私に教える。
:8 私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。
:9 それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう。
:10 まことに、あなたは、私のたましいをよみに捨ておかず、あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。
:11 あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。

前回、私たちはこの詩篇から、特にその前半、最初の４節から、私たちがどのような色をもっていなければならないのかということを考えました。神の前に敬虔な人物はどんな色をもって生きているのか、その特徴を五つ挙げて見て行きました。簡単に復習してみましょう。

〇敬虔な人物がもっている特徴

１．神に頼る

神の前に敬虔な人物は主に信頼をもって生きると言います。１節でダビデは祈りをしましたが、そこで彼は「神よ。」とヘブル語で「エル」ということばを使いました。全能な究極の力をもった神、その方こそ彼にとって岩であり避け所でした。ダビデは自分の神がどのような状況にあっても自分を守り、助け、ケアすることができることをよく理解していたのです。それゆえ、彼は他の敬虔な人と同じように、神のみに完全な信頼を寄せて神の前に生きて行こうとしたのです。

２．神の主権に従う

２節で**「私は、主に申し上げました。「あなたこそ、私の主。…」**とこのように告白するのです。ここで使われている「主」ということばは二つの違ったことばが使われていると言いました。ヤーウェーとアドナイです。ヤーウェーは神が契約の神であることを現わすときに使うご自身の名前です。アドナイは主従の関係をはっきりさせるものです。ここでダビデははっきり、神と契約の関係に基く個人的な関係をもっているゆえに、私は神を自分の主人として生きて行くというその宣言をしたのです。神の前に敬虔な人は、必ず完全で、決してこれはできないということがない絶対的な従順をもって主に従って行こうと願い求める人です。

３．神だけが最良、最善を与えることができると知っている

「私の幸いは、あなたのほかにはありません。」とダビデは２節の後半で告白しています。敬虔な人にとって、神以外に喜び、幸福を与えるものはないのです。どのような人生の状況にあっても、この神が私の主である限り、私は満足することができると言い続けることができるのです。なぜなら、この方こそ

人間にとって究極的な最もすばらしい存在だからです。それゆえに、この神をもっていさえするば他に必要なものはないと、そのように大胆に告白することができる人です。

４．聖徒との交わりに喜びを見出す

神を愛するがゆえに、神の家族であり神に愛されている人々との交わりを切に求める人です。それは単にみことばが私たちに命じていることだけでなく、その人が心から願うゆえに、私はできれば他の信徒たちといっしょに時間を過ごしたい、ともに神を崇めながら、ともに成長しながら生きて行きたいと、そのような願いをもつ者です。

５．偶像崇拝者たちの悪を憎む

聖徒との交わりを慕い求めるだけでなく、神を憎み自分の欲望のために生きて行こうとする人たちとの関わりをもちたくないと、そのように考えて、そのように生きようとしている人です。彼らにとって世は友ではなかったのです。

ダビデはまさにそのような人物でした。このようなことを自分の特徴として身に付けて人生を歩む者でした。ダビデの色は何色ですか？と問うなら、ダビデが生きた人生の色は敬虔な人物がもっている色だったのです。けれども、私たちはこの詩篇１６篇からそのことだけを学ぶのではなく、さらに、いくつかの事柄を学ぶことができます。今日は、皆さんといっしょに敬虔な人物がもっている確信ということを見て行きたいと思います。この部分は確かに、特徴に加えることができると思いますが、敢えて、大きく区切りました。なぜなら、ダビデはここで多くのことを私たちの教えてくれるからです。そのことをごいっしょに学びながら、私たちもダビデがもっていたのと同じ確信をもって、この人生を歩んで行くことができればと心から願っています。

☆敬虔な人物がもっている確信

私は敬虔な人物は確信に満ちた人だと思います。この人が確信に満ちているのは、その人が自分が偉大な者であると考えているから確信をもっているのではありません。また、その人があらゆる状況の中でしっかりその問題を解決して行く力をもっていると自分で思い込んでいるからでもありません。なぜ、敬虔な人が確信をもって生きることができるのか、それはその人が神に確信をもっているからです。事実、教会の歴史を見たときに、また、聖書を通して分かることは、確信をもっていた人たちは自分自身の能力に非常に大きな不安を抱えていた人たちでした。神の前に大きく用いられた人たち、特に、説教者たちの多くはいかに自分がメッセージをするのに値しない者なのかということを認識し、常に神の前にひざまずいて自分の足りなさを嘆き、それでも神が私を用いてくださることを確信しながらメッセージをしたのです。神は小さな者が神に信頼するときに、その者を大いに用いる方なのです。

ダビデもまさにそのような者だったと思います。彼自身が何か偉大な者であったのではありません。しかし、神に信頼し神に確信をおくことができたダビデは、神によって大いに用いられ、あらゆるときに動じることなく困難な中でこの詩篇１６篇のような詩を書くことができた人物でした。敬虔な者がもっている神に対する信仰、それがその人の人生に確信を与えるのです。そして、そのことを私たちは今日学んで行きます。

１．主が与えてくださる報酬に確信をもっている

４節に出て来た偶像崇拝者とは全く違って、敬虔な人は神の前に正しいことを為して行こうと願って出て行きます。ダビデは４節で彼がいかに偶像崇拝に走った者たちを憎んでいるのかを告げていましたが、５－６節ではダビデは自分自身の姿を表わしています。**「:5 主は、私へのゆずりの地所、また私への杯です。あなたは、私の受ける分を、堅く保っていてくださいます。:6 測り綱は、私の好む所に落ちた。まことに、私への、すばらしいゆずりの地だ。」**、ここでダビデが語っていることは、民数記１８：２０に出てくることばと非常に似ています。**「主はまたアロンに仰せられた。「あなたは彼らの国で相続地を持ってはならない。彼らのうちで何の割り当て地をも所有してはならない。イスラエル人の中にあって、わたしがあなたの割り当ての地であり、あなたの相続地である。」**、約束の地を相続したイスラエルの民が１２の部分にそれを分割しましたが、そのときレビ人には土地が与えられませんでした。他の部族たちは自分たちの土地を得、自分たちの町を建て、自分たちの畑を耕して、自分たちの所有財産を得たのですが、レビ人にはそれが与えられませんでした。彼らの所有地、相続財産は神は「わたしだ」と言われるのです。だから、彼らにはそのような土地は必要ではなかったのです。彼らに与えられていたすばらしい約束の報いは主ご自身であり、レビ人は神に完全な満足を見出すことができたのです。ダビデは６節で与えられているすばらしい**「ゆずりの地」**について話をします。そして、それがいかに確実に与えられるのか、それがいかにすばらしいものであるのかという確信をここではっきり告げています。この５－６節で使われている表現、神が実際に測りの綱をおいて土地を与えるということを言っているのではないことは明らかですが、このような比喩的表現をもってダビデは神から所有することができる財産を得ることができると、そのことを告げています。しかも、それはすばらしいものであり、彼を喜ばせる祝福であると言います。この

「ゆずりの地所」、「杯」、「測り綱」、「ゆずりの地」はすべて彼が受けることができるすばらしい祝福を表わしているのです。これらはすべて、ダビデが喜びに満ちた人生を送って行くために、その報酬がすばらしいものであるということを表わすために書かれているのです。実際に６節で訳されている**「すばらしいゆずりの地だ」**という表現は、このように直訳することができます。「事実、私の相続地は私にとって私にとって喜ばしいものである」と。

ダビデは神が与えてくださるその報酬がいかにすばらしいものであるのかということをよく理解していました。彼の息子、ソロモンとは違って彼はこの地上にある財産を慕い求めて生きることはしませんでした。多くの人々は神の前に正しく歩んで行こうと願いつつ、同時に、この地上においても安心、安全を求め、また、重要な者でありたいとして地位や名誉や財産を求めて生きる人生を送っています。人々はお金を慕い求め、土地を慕い求め、また、人間関係の中にすばらしい喜びを与える報いを求めて生きようとするかもしれません。今日でもそのような姿を私たちは見るでしょう。私たちは何とかして今生きているこの地上においてそのようなものをすぐに得たいのです。けれども、敬虔な人はそのようなことに目を向けることはないのです。なぜなら、彼らにはもうすでに神ご自身が約束されているからです。神こそが彼の**「ゆずりの地」**、神こそが彼にとっての相続財産だからです。イエスは山上の説教の中でこのように言われました。**「自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。:20 自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。:21 あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。」**（マタイ６：１９－２１）。そして、同じセクションの中で続けてこのように言います。**「だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。」**（２５節）、心配する必要はないと。では、何をしなければいけないのでしょう？イエスは続けて言われます。３３節**「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」**、敬虔な人はこの地上において**「神の国とその義とを」**求めて生きて行くのです。天の御国に属する人はこの地上の事柄を心配するのではなく、神の事柄を心配します。そのことに心を向けるのです。なぜなら、どれだけ地上のものをもっていても、私たちはそこに満足を見出すことはありません。**「神の国とその義」**が私たちのうちに、私たちの周りにしっかり反映されるときに、そこに初めて私たちは心からの満足をもって生きて行くことができるのです。

パウロはコロサイ３：１－２でこのように言いました。**「こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。:2 あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。」**と。皆さんは神に救われた者としてその瞬間から約束を得ています。あなたには場所が備えられているという約束です。イエスは言われました。渡される最後の晩に２階の部屋で弟子たちにこのように告げました。わたしが去るのは良いことだ、なぜなら、わたしは場所を備えに行くからと。皆さんはどのように生きておられますか？この地上において様々なことを手に入れるためにやっきになっているのか、それとも、神の国とその義とが実現することに喜びを見出し、神が与えてくださるすばらしい報いに目を向けて生きておられますか？黙示録の最後で新しいエルサレムが降りてくるとき、その都の一番の特徴は様々な宝石に満ちた町の造りや輝きに満ちたその町の姿、形ではなく、そこに神がおられ神がともに住み、神が永遠に私たちと離れることなく交わりをもってくださる、それこそが私たちにとっての一番の祝福です。その約束が今私たちに与えられているのです。皆さんには、ダビデと同じように報いが与えられるという確信がありますか？決して、朽ちることなく汚れることもなく、消えて行くことのない資産を受け継ぐことができるのだというその確信をもっておられますか？それゆえに、それに基いてこの地上の生活を送っておられますか？敬虔な人はその確信をもっています。だから、敬虔な人は貧困の中にあっても満足をもって生きるのです。この地上での財産はどうでもいいからです。その人は裕福な中にあってもへりくだって生きることを知っているのです。なぜなら、どれだけもっていてもそれらは何の意味もないことを知っているからです。皆さんはそのように生きておられますか？約束に目を向けて…。

２．神との関係に確信をもっている

５節の後半を見てください。**「あなたは、私の受ける分を、堅く保っていてくださいます。」**、なぜ、敬虔な人は神が与えてくださる報いに確信をもつことができるのでしょう？それはまさにこの約束、神との個人的な関係をもっているからです。ダビデは神との間に愛に満ちたすばらしい関係が築かれているということがよく分かっていました。それゆえに、ダビデは言います。**「あなたは、私の受ける分を、堅く保っていてくださいます。」**と。この表現は先ほど見た部分と合わせて、この５－６節をある注解者はこのように説明します。「たとえ、ダビデが願うものが何であったとしても、ダビデは神のうちにそれらを所有し、神のうちにもっているあらゆるものは常に神によって安全に保たれている。」、ダビデはそのこと

を告白していたのです。私が何を願ったとしても私はそれを神のうちに見出すことができると。私に喜びを与えるものは何でしょう？それをどうぞ私に与えてください、ダビデは神のうちにそれを見出すのです。そして、その喜びは決して私から取り去られることはありません、神が守ってくださるからと言うのです。世の中の人は満足をいろいろなところに求めて行きます。しかし、ダビデは分かっていました。神に満足を見出すことができるから、私にはその満足が必ず与えられる、そして、その満足は私のうちにあり続ける、なぜなら、神が守ってくれるからと。このような確信はダビデ自身が神と愛に満ちた関係にあったからもつことができたものなのです。

パウロはローマ８：２８－３０でこのように言います。**「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。:29 なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。:30 神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。」**、世の初めから神は神を愛する人たちを神の栄光へと定めてくださる、守り続けてくださるのです。あらゆる良いことを神は私たちが神の栄光を現わす者となるように用いて使ってくださるのです。似たようなことを詩篇の著者も表現しています。詩篇７３：１**「まことに神は、イスラエルに、心のきよい人たちに、いつくしみ深い。」**と、この**「いつくしみ深い」**ということばはときに「良い」と訳すことができます。神はどのような人たちに良く接してくださるのでしょう？心のきよい人たちです。エレミヤはエルサレムが崩壊して行くその姿を見ながら「哀歌」を書いてこのように言いました。**「主はいつくしみ深い。主を待ち望む者、主を求めるたましいに。」**（哀歌３：２５）と。前回も見たように、私たちの神は私たちにとっての巌です。神は常に私たちによく接してくださり、私たちに誠実な方です。私たちを裏切ることなく私たちを常に愛の関係の中に保ってくださり、それゆえに、私たちは何一つ恐れるものはないのです。エレミヤにとって、バビロン軍がエルサレムを侵略し、ソロモンが建てたあの栄光の神殿が破壊されているその姿を見たとき、彼は絶望の中にあったのかもしれません。これ以上、ひどい状況は考えることができなかったかもしれません。自分が死ぬことよりも神の神殿が破壊される姿を見ることのほうがよほど苦しかったのではないでしょうか。けれども、その中にあってエレミヤの確信は揺るぐことがなかったのです。だから、そのような不幸の中にあって**「主はいつくしみ深い。主を待ち望む者、主を求めるたましいに。」**と言うのです。確信を失うことは簡単です。周りを見るとき、そこには心配、不安になることがたくさんあります。いろいろな状況を見たとき、そこには私たちが神の前に本来もっているべき確信を失わせる材料がたくさんあります。けれども、そのような中にあって敬虔な人物は常に私たちの神はどんなときでも私たちを愛してくださり、私たちが抱えるどのような問題よりも力強く偉大な方であることを覚えるのです。

貧しさの中で途方にくれることがあるかもしれません。しかし、神はその必要を知っておられます。神が願うならいくらでも私たちに備えることができます。健康が失われて、神への確信が失われることがあるかもしれません。そのときにも、私たちは覚えることができます。神が望むなら、神は癒し主だから私を癒すことができる、たとえ、癒されることがなくても神の栄光がそこに現わされているなら、そこに満足を見出すことができるのです。悲惨な人間関係の中に置かれることがあるかもしれません。その中でも神はその問題を解決できる方法を知っておられ、その中に留まり続けてそこで神のすばらしさを証することができるようにしてくださるのです。聖書は私たちに繰り返して教えます。神が私たちの前に堅く立ってくださり、私たちが恐れることなく先に進んで行くことができるように助け続けてくださることを。

神はアブラハムにこう言いました。創世記１５：１**「…アブラムよ。恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きい。」**と。また、この同じ約束がアブラハムの子孫に与えられました。出エジプト１４：１３では神はモーセを通して彼らに告げます。**「それでモーセは民に言った。恐れてはいけない。しっかり立って、きょう、あなたがたのために行なわれる主の救いを見なさい。あなたがたは、きょう見るエジプト人をもはや永久に見ることはできない。」**。アッシリヤ人がエルサレムの町を囲んだときに、ヒゼキヤ王はイスラエルの民に対してこのように言いました。**「強くあれ。雄々しくあれ。アッシリヤの王に、彼とともにいるすべての大軍に、恐れをなしてはならない。おびえてはならない。彼とともにいる者よりも大いなる方が私たちとともにおられるからである。」**、そして、イザヤ書の中では主ご自身がこう言います。**「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。」**（４１：１０）。皆さんは今私たちに聖書が語ったことがらを信じておられますか？本当にそのことに確信をもっておられますか？皆さんの主であり救い主である神は私たちのために常に最善を為してくださるゆえに、私はどのような状況の中でも大丈夫ですと言える、それだけでなく、事実神はすばらしい報いを与えてくださることを約束しておられるから、その約束が必ず守られ、私に常に最善が与えられていることを知っているから、私は神に私はこの苦しい状況

を感謝します、私は何とあなたに愛されあなたからの幸いを受けているのでしょうと言うことができますか？神の前に敬虔な人物は恐れを知りません。神の前に敬虔な人物は神以外のものを恐れることはありません。敬虔な者はあらゆる状況の中で主の最善が必ず為されることを知っている人物です。それゆえに、感謝と喜びをもって生きるのです。皆さんはそのようでしようか？

３．神のみことばに確信をもっている

７節にはこのように記されています。**「私は助言を下さった主をほめたたえる。まことに、夜になると、私の心が私に教える」**、神から与えられる報い、そして、神との関係、それだけでなく、神のみことばに確信をもっています。神ご自身が確かに語られたから、報いが与えられることも、神が私を愛し続けてくださることも絶対的な真実であるということに確信をもつことができると言うのです。それゆえに、敬虔な人は神のみことばを信頼します。ダビデがここで語っていることはそれほど難しいことではありません。神はダビデに助言を与えてくださったのです。どのような方法で与えられたのか私たちには分かりません。直接的な啓示があったのかもしれないし、もしかすると、彼はみことばを読んでいたのかもしれないし、これまでに聞いてきたみことばを思い巡らすことによって教えてくださったのかもしれません。その方法がどうであったとしても私たちに分かることは、神が語られたことばがダビデに確信をもたらしたのだということです。この**「助言」**ということばは「勧める、励ます、アドバイス」と訳すことができます。それは常に神がだれかを導くときに使われることばでもあります。詩篇の著者たちは多くのときにこの「導き」ということばを発しています。詩篇７３：２４**「あなたは、私をさとして導き、後には栄光のうちに受け入れてくださいましょう。」**、４８：１４では**「この方こそまさしく神。世々限りなくわれらの神であられる。神は私たちをとこしえに導かれる。」**、１１９：１０５では**「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」**とあります。神のみことば、神の助言、神からの啓示というのは、私たちの歩みを神の方へと導きます。私たちの足もとを照らし、私たちの行くべき道を明らかにし、私たちがそこへ従って進んで行くことができるように助けてくれるのです。

それゆえに、ソロモンはこのようなことばを残しました。箴言６：２０－２３**「わが子よ。あなたの父の命令を守れ。あなたの母の教えを捨てるな。:21 それをいつも、あなたの心に結び、あなたの首の回りに結びつけよ。:22 これは、あなたが歩くとき、あなたを導き、あなたが寝るとき、あなたを見守り、あなたが目ざめるとき、あなたに話しかける。:23 命令はともしびであり、おしえは光であり、訓戒のための叱責はいのちの道であるからだ。」**、神のみことばは私たちを教えます。どのように主のために生きて行くべきなのかということを。ペテロはⅡペテロ１：３でこのように言います。**「というのは、私たちをご自身の栄光と徳によってお召しになった方を私たちが知ったことによって、主イエスの、神としての御力は、いのちと敬虔に関するすべてのことを私たちに与えるからです。」**、**「いのちと敬虔に関するすべてのことを」**神はもうすでに私たちにイエス・キリストを通してみことばによって与えてくださったのです。私たちがどのように生きるべきなのか、どのように神に喜ばれる者へと変わって行くべきなのか、この聖書が私たちにそれを教えてくれるのです。皆さんよくご存じのように、Ⅱテモテ３：１６ではみことばこそが**「…教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。」**とあります。このようなすばらしい神からの助言のゆえに、ダビデは主の前に礼拝をささげて行くのです。ダビデはどのような状況に置かれていても、神が教えてくださっていることに目を向けてそこに留まろうと心がけたのです。確かに、多くの困難なときがあったでしょう。ダビデの人生を見ると困難に満たされています。その中にあってダビデは常にそのような状況の中に留まるのではなく、神が教えている真理に導こうとしたのです。それが敬虔な者の姿です。聖書のことばを知っているけれどそれはできません、したくありません、そんなことはしたくありませんということがないでしょうか？敬虔な人はそのとき自分に言い聞かせます。違います、確かに私の感情はどん底まで落ち込み、私の前にある困難はもうこれ以上ないほど高いところまで来ているけれど、その中にあって私が確信するのは自分がどう感じるかではなくて、自分がどう見るかではなくて、みことばが何を言っているかであると。イスラエルの民がカデシュバルネアに到達したとき、民は１２人の斥候を約束の地に送りました。１２人は戻って来て「もうだめだ」と言いました。あの地はすばらしいけれどそこを侵略することなどできない、敵は強い、城壁は高い、私たちの力では無理だ、だから、新しいリーダーを立てて早くエジプトに帰ろうと言います。そのときに二人の敬虔な人物、カレブとヨシュアはこのように言います。**「ただ、主にそむいてはならない。その地の人々を恐れてはならない。彼らは私たちのえじきとなるからだ。彼らの守りは、彼らから取り去られている。しかし主が私たちとともにおられるのだ。彼らを恐れてはならない。」**（民数記１４：９）と。なぜ彼らはこのように言うのでしょう？彼らも他の人たちと同じ状況を見たのです。あそこには巨人がいる、彼らの町は非常に侵略し難いものだ、とてもその地に入って行くことなどできないと皆思ったのです。でも、カレブとヨシュアはそのように思いませんでした。なぜなら、彼らは神が約束したことを確信していたからです。あの地はあなたたちに与えると。皆さんももしかすると自分の人生が進んで行く未来に斥候を送ることをするかもしれません。このような状況が続くなら私

の人生は不安に満ちて恐れに満ちて悩みに満ちてしまうかも知れない、そのとき皆さんはその斥候のことばに耳を貸しますか？それともみことばを確信する斥候のことばに耳を貸しますか？敬虔な人物は常に言います。神のみことばは常に正しいと。たとえ、それを信じることが難しい状況にあっても、神はうそをつく方でないことをよく分かっているゆえに、神のみことばに記されていることをする限り、私は神の前に正しいことができると理解しそれを実践して生きようとします。

４．神に受け入れられることを確信している

８節を見てください。**「私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。」**、神の前に敬虔な人は神に受け入れられることがよく分かっています。ここは三つの部分に分けることができます。簡単に見て行きます。

（１）堅信＝非常に堅い決意をもっています。そのことが最初に記されています。**「私はいつも、私の前に主を置いた。」**と。このことはダビデがどんなときでも神以外のものを自分の目の前には置かないという決意を表わしています。ダビデにとって、神こそが常にどんなときにも変わることがない目標だったのです。ダビデに何のために生きていますか？と問うとき、彼は自分の人生が順調なときも不幸に満ちていると考えられるときも、同じように私の人生は神を目指している、私の目の前にあるのは神だけですと答えるでしょう。彼の目は常に神を見つめています。ヘブル１２：１－３を見ましょう。１１章で信仰の偉人たちの話をした後、著者はこう言います。**「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。:2 信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。:3 あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。」**、創始者であり完成者であるイエスから目を離してはいけないと言います。皆さんの目はどこを向いていますか？皆さんは毎日の生活の中で「私は今日、私の目の前に神を置きます」と言っておられますか？私が今日、あらゆる状況の中で見るものは神ですと、そのような堅信をもって決意をもって歩もうとしておられますか？

（２）認識＝「主が私の右におられるので、」、神は右におられると言います。なぜ、**「右」**におられることが大事なのでしょう？この表現は、右の位置は常に栄誉の位置であり特権の位置であり、何よりも優先するものの位置であるということです。それゆえに、右手にだれがいるのかということは非常に重要なことだったのです。ダビデは神が自分の人生の中で最も栄誉を受け、最も優先され、最もすばらしい特権をもっている権威者であるということを、**「私の右におられる」**ということで表現しているのです。ダビデにとって一番重要だったのは自分自身ではなかった、神でした。前に置き右にいることを認めたのです。だから、彼は神に喜ばれることをしようとするのです。神がその支配をしっかり発揮して神を称えることができる人生を送ることです。ダビデにとって神以外に重要なものはありませんでした。神こそがすべてだったのです。

（３）安心＝「私はゆるぐことがない。」と言います。安心、満足ということばを使うことができるでしょう。彼は決意をもって私は神以外のものを見つめることはしませんと言い、そして、しっかり認識したのです。神こそが私にとって最も優先するものですと。それゆえに、**「私はゆるぐことがない。」**のです。どのようなことが起こったとしても、どのような苦しみ困難があったとしても、また、幸福があったとしても、それによって私はゆらいでしまうことはないと言います。パウロはローマ８：３１でこのように言っています。**「では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」**と。詩篇の著者も言います。詩篇２７：１－３**「主は、私の光、私の救い。だれを私は恐れよう。主は、私のいのちのとりで。だれを私はこわがろう。:2 悪を行なう者が私の肉を食らおうと、私に襲いかかったとき、私の仇、私の敵、彼らはつまずき、倒れた。:3 たとい、私に向かって陣営が張られても、私の心は恐れない。たとい、戦いが私に向かって起こっても、それにも、私は動じない。」**と。皆さん、恐れることがありますか？恐れを抱くことがありますか？ダビデは言います。皆さんが神を目の前に置き、神を右手に置き、皆さんの人生を主に向かって真っすぐに、主の栄誉を求めて、主を最優先にして生きるときに、恐れる必要はないと。だから、確信をもちなさい、神に受け入れられる生涯を送っているから、神が望む道を神が見ておられるからそのように生きるし、神を最優先にしているからゆるぐことはないのです。敬虔な人は確信に満ちた人です。敬虔な人はその人生においてゆらいでしまうことがありません。非常に安定している人です。彼は神が与えてくださる報いの約束が現実であることをよく理解しているゆえに、恐れることも不安に思うこともありません。むしろ、希望に満ちています。

彼は神との関係が現実のものであることをよく分かっているゆえに、神が最善を与え続けてくださることを確信して生きていました。敬虔な人物は神のみことばが正しいことをよく分かっているゆえに、そのみことばが正しい生涯へと導いてくださることを知っているのです。そして、敬虔な人物は神に受

け入れてもらえることがよく分かっているゆえに、神から目を離さず神を最優先して生きる人生を送るのです。それゆえに、その人は確信に満ちています。私たちが今日、自分自身に問いかけなければいけない質問は明らかです。皆さんは確信をもって生きておられますか？どのような状況にあっても大丈夫です、神が私の味方ですから、神の最善を為して行く限り、私はその人生に幸いが約束されていることを、困難な中にあっても苦しみの中にあっても、必ず、神がそこに最善をもって接してくださり、それこそがまさに最善であることを理解して、正しく歩んで行くことができる、希望をもって喜びをもって、ゆらぐことのない確信をもって…と。

皆さんの人生の色は何色でしょう？それは天国の色をしていますか？それともこの世の色をしていますか？そのことに皆さんは答えなければいけないのです。